様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２７５０

研究課題名（和文）スイスにおけるレト・ロマン語の社会言語学的・異文化コミュニケーション的研究

研究課題名（英文）Sociolinguistics and intercultural communication studies in Rhaeto-Romance languages and cultures in Switzerland

研究代表者
中川　裕之（Nakagawa, Hiroyuki）

大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・教授

研究者番号：１０２７５０００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：スイスの小言語レト・ロマン語の言語文化を考察した。過酷な自然環境にありながら列強諸国が行きかう交通の要衝に位置するグラウビュンデンはドイツ語を併用しつつもいまだアイデンティティを失っていない。言語的にも、他に対して門戸を開き、多様性を受容したことがその要因の一つと考えられる。歴史的には、聖書を現地語に翻訳し地域住民の啓蒙と識字教育につなげた点が特筆される。５方言から統一標準語構築の試みは、他国からの独立と自国を多言語国家と位置付ける象徴になったが、必ずしも地域住民には受容されていない。憲法にレト・ロマン語を国語と定める国策と、住民の旺盛な独立心が符合して、地域の言語文化の存続につながっている。

研究成果の概要（英文）：This project, which has gathered and compared data from communities in the south-eastern Swiss canton of Grisons in oder to grasp the situation comprehensively, contributes a accurate description of the dynamics of the linguistic situation of the Romansh-speaking area. Romansh is descended from the spoken Latin and has been influenced by German in vocabulary and syntax. Romansh can be said to be bastardised language; for example, Mussolini believed Romansh to be an Italian dialect and declared that Grisons belonged to Italy. But the Romansh-speaking people did not think of their Italian heritage. And Romansh is endangered because of its fragmentation; thus "Rumantsch Grischun" was artificially developed with the aim of ensuring the survival of Romansh. However, speakers of Romansh are fairly unimpressed. Romansh will be successful if they are willing to use the language, to pursue their identity and with the sociolinguists cooperatively to do research on the language and culture.

研究分野：ドイツ語学文学、社会言語学、スイス地域研究、外国語教育

キーワード：スイス地域研究　多言語主義　グラウビュンデン　言語マイノリティ　レト・ロマン（ロマンシュ）語　社会言語学　外国語教育　ドイツ語学文学

１．研究開始当初の背景

(1) 筆者はこれまで多言語国家スイスの国語の一つであるレト・ロマン語圏における多言語・多文化主義を対象とした調査研究を行うとともに、その社会的背景や影響を考察してきた。その成果として『ヨーロッパ・ことばと文化－新たな視座から考える』（2013、大阪大学出版会）において、変容することば－現代ドイツ語の時空間と機能」を公刊してきた。その際、言語が有する多様性に着目し、言語はその各種変異形において、意思伝達を特徴づける大きなエネルギーが内在している様を具体例を用いながら明らかにした。

(2) レト・ロマン語関連の研究の予備的考察と位置付けられるのが「多言語国家スイスと小村ディセンティス」（上掲書所収）である。これら研究において、当該地域に現代社会が直面する多様性と、それに起因する問題を回避する可能性が内在することを示してきた。その際の重要な参照項となったのがイゾ・カマルティンの『言語の他に失われるものは何か？小言語のための最後の弁明』（1985 年）である。彼はスイス・グラウビュンデンのスールセルヴァ方言地域の拠点ディセンティスに生まれ、異文化コミュニケーション、バイリンガリズム、翻訳論について論じており、本書からヨーロッパ言語文化について造詣の深い、現代スイスを代表する文化人である。イゾ・カマルティンの母語を育成したレト・ロマン語圏は、大言語ドイツ語との二言語併用地域でもある。自らのアイデンティティの基盤をなす地域言語文化と、母語である小言語レト・ロマン語、そして生活上不可欠な大言語ドイツ語との微妙な関係性に焦点を定め、おのれの実体験に即しながら、大言語であるドイツ語を用いて発信し続けている。イゾ・カマルティンとは継続的にコンタクトをとりながら翻訳を進めている。

(3) 森田安一編『スイスの歴史と文化』（1999 年、刀水書房）によると、小言語レト・ロマン語について「この世から消滅するのは、時間の問題であろう」と言われている。グラウビュンデンの特色ある文化はレト・ロマン語諸方言によって支えられてきた。その小言語が消滅の危機に直面していることは、この言語を第一言語（母語）とする話者数の減少傾向から見て否定しがたい。にもかかわらず、グローバル化の大波が押し寄せる現代まで生きのびたこの小言語は、丹念な保存活動が奏功し、21 世紀の今に至るまで消滅していない。この事実は、言語文化の多様性の重要性を内外にアピールするものである。と同時に、現代をモノリンガル＝「グローバル化」、という単純な構図によって理解されようとすることの限界を白日の下にさらした。つまり、小言語＝消滅の危機と、マイノリティの言語文化がマジョリティの言語文化に吸収され消失するという方向には、必ずしも一直線には向かっていないことを示したのである。

(4) 民族間紛争の絶えぬ国際社会にありながら、わが国と同様に狭隘で天然資源の乏しいスイスにおいて、かくのごとき小言語保全の諸活動を丹念に考察・分析することは、異なる言語文化を有する人間相互の理解と共存、異文化コミュニケーション、多文化共生の可能性を示すとともに、人口減少社会に突入したわが国日本に対しても意義ある学術的見解を提示することができると考えた。そのために、スイス・グラウビュンデンの当該小言語使用地域においてフィールドワークを展開し、その現状を調査分析せねばならない。本課題遂行のために、言語学的専門知見に基づいて、母語話者に対して現地調査を実施することが不可欠であると考えるに至った。

２．研究の目的

(1) ヨーロッパという地域が備える多様性―多言語・多文化―は、21 世紀の現代世界においてなお、世界に対して有意義な観点を提供している。その一つに小言語の使用が挙げられる。昨今、小言語は衰退の一途にあるとされる傾向にある。本研究では、ヨーロッパ諸国の中でもとりわけ中立的小国のスイスにおいて、大言語のドイツ語を対照項として、小言語のレト・ロマン語に関わる言語変異と、それに基づく各種文化的営為を実地調査することによって、言語と地域共同体、すなわち言語社会との相互作用である異文化コミュニケーションについて考察する。

(2) 言語変異は日常生活の領域のみならず、教育や法律などの言語文化社会の領域で見られる。大言語と小言語を併用するこの多言語・多文化地域に着目し考察することで、(a) 軽視されがちな小言語による言語文化の固有の地位と価値を実証するとともに、(b) 小言語＝消滅の危機という旧来の見方を脱し、困難だが乗り越えるほかにない異文化障壁と、その結果生まれる相互理解に対して、新たな視点を提供することが本研究の目的である。複数の小言語、すなわち諸方言から、共通語を新たに創出しようという意欲的な試みが企てられている当該地域の活動と、その一つの成果としての大規模な言語百科事典の製作過程をつぶさに検討しながら、2000 年以降の言語文化保護育成活動の新展開と限界、そして将来におよぶ実施計画に至るプロセスを綿密に検証し分析する。

３．研究の方法

(1) 本研究において採用する具体的な研究の方法は、①社会言語学的側面と②異文化コミュニケーション側面からの実証的な社会文化調査である。これら観点を機動的に相互参照しながら進める。第一に、小言語の使用の継続を、ある程度まで保障するのが、何ら

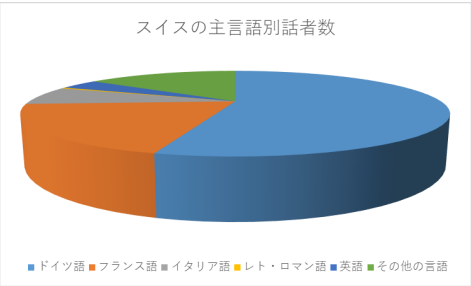
かの公的法的な社会システムであるとするならば、20 世紀から 21 世紀にわたる具体例の検討は、同時に、そうした生活・文化の通時的変遷を跡づけることになると考える。この時期には、いわゆる両大戦期と前後して、中立国家スイスがいかにして自国の保全をなしえたか、という側面を切り離して考えることは不可能である。その後、急速にグローバル化、モノカルチャー化が進行したため、相対的に小言語、小文化の範囲が縮小・限定されてしまった。にもかかわらず、多文化主義の重視と、異文化理解という観点から、なんとか消滅を免れているというのが、当面の仮説である。スイス全体というマクロ的視点から、多言語状況であることを示すデータを次に取り上げる：

表 1　スイス全土の主言語別の話者数

	人数	%
ドイツ語	5,046,400	63.5%
フランス語	1,791,100	22.5%
イタリア語	642,900	8.1%
レト・ロマン語	9,250	0.5%
英語	347,300	4.4%
その他の言語	1,376,700	17.3%

（スイス連邦統計局　2015 年 より）

図 1



この資料――話者が複数言語を主言語と表明していることを含むデータ―から読み取れるように、ドイツ語話者が過半数を超えているとは言え、スイスは多言語社会であることは間違いない。先述した社会言語学的研究と異文化コミュニケーション的研究を相互参照することによって、「小言語」と「マイノリティ」、「大言語」と「マジョリティ」との社会言語学的・異文化コミュニケーション的関係を、このように俯瞰的に示すことができる。

(2) 第二に、本研究において鍵となる概念である「小言語」を確定しなければならない。そのための手がかりとなるのは、レト・ロマン語圏に散在する 5 方言のうち、最大勢力である「スールセルヴァ方言」の地位の確定である。イゾ・カマルティンはこの方言の母語話者であるものの、生活上の必要からドイツ語を用いる二言語併用者（バイリンガル）である。従来は、経済活動や学術活動には無用な、単なる地方の小言語にすぎないと捉えられがちだったレト・ロマン語であるが、系統の異なるドイツ語（ゲルマン語）とレト・ロマン語（ロマンス語）の両方に通じることによって、むしろ片方の側だけからでは見渡すことのできない全ヨーロッパ的知性と豊饒な多文化性を我がものとしていることは、特筆に値することである。多様な価値観と文化的成果を視野に収めた文化論を語るには、その基盤としての多極的思考と多様性を有することが大きなメリットとなっている。このような特性を持つ人物を主たるインフォーマントとして言語調査を実施しながら、多極的文化論へと発展させねばならない。このような認識に基づいた議論をより高度なレベルに進めるためには、言語学の実証的手法と理論をカノンとすることによって、多文化的ディスコースの記述と分析が可能となる。

(3) 第三に、小言語と当該マイノリティとの関連をより詳細に考察・分析するために、上記「研究目的」において二分した社会言語学的研究と異文化コミュニケーション的研究を相互補完的に実施した。①社会言語学的研究では、スイスにおける小言語地域において社会言語学的実地調査と文献学的調査といった両面から対象にアプローチすることを通じて、多言語多文化並存状況の個別事例を調査・分析し、この作業を通じて類型的モデル化を試みる。これは全体の進行を左右する作業であるため、まずは社会言語学的研究に力を入れる。次いで②異文化コミュニケーション的研究に踏み込むが、歴史的な観点、とりわけ宗教改革期の当地の言語マイノリティの動向と文化活動―具体的には聖書翻訳―に焦点を絞って研究する。すなわち共時的には現地聞き取り調査と、通時的には現地でしか得られない貴重な文献資料の収集を行いながら、社会言語学的および異文化コミュニケーション的研究を積み重ねた。

4．研究成果

言語文化の対象領域の確定は、5 方言との境界的および重複的事例について、慎重な検討が不可避である。応募者の専門であるコーパス言語学の手法と親和性の高い社会調査法に則って実施されるこの作業は、学問的枠組みを確保しながら学術的論文はもとより一般向け著書として発表した（下記参照）。

(1) 社会言語学的研究

ドイツ語のような大言語に対峙する小言語としてレト・ロマン語に関する社会言語学的研究を進めた。その際、コーパス言語学といった言語学手法―社会調査法と極めて親和性の高い実証的研究―を積極的に活用して、スイス・グラウビュンデンのレト・ロマン語状況の記述にすでに実績のある著者が研究を行った。

① レト・ロマン語が用いられているのはスイスの中ではもっぱらカントン・グラウビュンデンに限定される。スイス全土における各言語話者の人数については、先に表 1 および

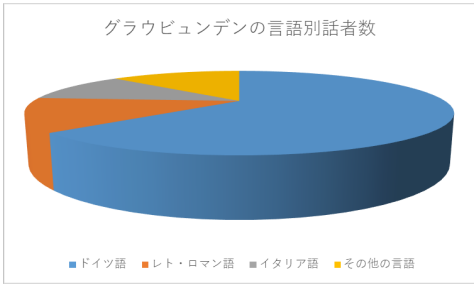
図 1 として具体的に提示したが、グラウビュンデンにおける言語状況をまず把握しておく必要があると考える：

表 2　グラウビュンデンの言語別の話者数

	人数	%
ドイツ語	124,578	64.0%
レト・ロマン語	25,305	13.0%
イタリア語	21,412	11.0%
その他の言語	25,305	13.0%

（州政府公表値 2015 年 より）

図 2



このように、依然としてドイツ語が過半数を占めていながらも、レト・ロマン語話者の割合も 13%にのぼっていることが読み取れる。この地ではさらなる言語マイノリティ集団としてイタリア語話者の存在にも注意を払う必要があるだろう。

② 両大戦間期およびその前後の小言語のステータスを論じる上で、実社会における言語コミュニケーションの問題である教育と司法の分野のさらなる検討は必須である。とりわけ学校や地域共同体における教育機会と、実際の司法の場において繰り広げられている、旧来の住民と外来の移民との間に生じる異文化コミュニケーションの実態（移民・難民問題）や軋轢、その場合の平和的解決策の検討は、本研究における社会言語学的研究と異文化コミュニケーション的研究と並んで必要不可欠な観点であり、この点に関して今後さらに発展させる予定である。

(2) 異文化コミュニケーション的研究

レト・ロマン語はまごうかたなき小言語であるが、たとえドイツ語であっても見方を変えれば―たとえば比較参照項として英語のような巨大言語を想定すれば―相対的に小言語となる。ともあれ最大のスールセルヴァ方言は、残りの 4 方言からすると相対的に大言語の地位を有することになる。こうした、いわば相対的な入れ子構造は、当の問題を論じる際の重要なポイントとなる。視点を固定することなく、ミクロ的視点とマクロ的視点の両面から柔軟にとらえ直さねばならない。すると具体的個別事例は、言語変異、アイデンティティなどの観点から多角的に比較・分析することが可能になる。のみならず、新たな異文化理解に向けた提案を行うことができるだろう。

① 共時的研究成果

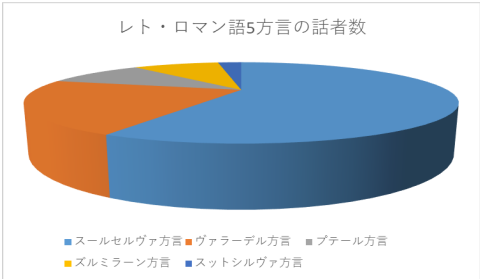
『ディクツィオナリ・ルマンチュ・グリジュン』とは、レト・ロマン語文化百科辞典のことであり、ドイツ語の名高い『グリム言語百科辞典』に匹敵するような大規模で網羅的な総合的辞書である。州都クールに設置された研究所において現在も、この辞書の完成を目指して地道な作業が続けられている。レト・ロマン語は形態的にもかなり異なる 5 方言（下記参照）からなっている：

表 3　レト・ロマン語の 5 方言の話者数

	人数	%
スールセルヴァ方言	13,879	57.8%
ヴァラーデル方言	5,138	21.4%
プテール方言	2,343	9.8%
ズルミラーン方言	2,085	8.7%
スットシルヴァ方言	571	2.4%

（リアルマンチャ 2015 年 より）

図 3



将来に渡る言語的存続のための言語政策の一環であると思われるこの辞書作成活動の実態を調査することができた。そこではきわめて精緻な辞書学的言語収集と分類が行われていた。その具体的リソースは、当地域に伝承される各種物語の果たす役割が大きい。またこの成果に基づいて 5 方言の言語学習教材―幼少期からの母語話者の育成のための子供向け教科書を含む―が作成されるとともに、スイスの一国語として、賛否や紆余曲折はあっても、対外的に大きな意味を持つ共通レト・ロマン語の作成の試みも同時に行われている点は特筆に値する（これは言語・文化保護促進のために設立された言語文化機関「リア・ルマンチャ」によって先導された）。言語を基盤とした有形・無形文化財保護育成活動を詳細に調査・考察した結果、このような言語存続・育成活動は、話しことばとしての一方言にとどまることなく、書きことばの定着化を目的とした大胆な挑戦であり、伝統と文化の継承作業であり、そして当該地域のアイデンティティを保持するための、偉大な文化社会的任務を併せ持っていることが見て取れた。こうした活動は人口減少時代に突入した地域日本社会にも導入することができるはずである。

② 通時的研究成果

レト・ロマン語と一口に言っても、その実態は 5 方言に細分化されることは先に見てきた。さほど広くない地域内であってもかくのごとく分化しているのは言語共同体間の相互交流を阻む深山幽谷、自然環境の過酷さを

物語る。ともあれ5方言の中では最大勢力を誇る「スールセルヴァ方言」の拠点はカトリックのベネディクト会修道院がそびえるディセンティスである。ちなみに第二勢力である「ヴァラーデル方言」地域はプロテスタント優位の地域である。いずれの地域にせよ歴史的には宗教的色彩が濃い。歴史的に見ると、各方言地域住民はみずからの母語方言によって聖書関連のことばを理解したかったし、また表現したかった。そのために、ヨーロッパ各地で学んだ聖職者たちは、地元へ学識を持ち帰り、ラテン語やドイツ語によって記された聖書のことばを当地の 5 方言へ翻訳し、識字教育などの啓蒙活動を精力的に行った（下記参照）。

表4　レト・ロマン語への聖書翻訳者たち

氏名	聖書関連の翻訳書	出版年
ﾌｨﾘｯﾌﾟ･ｶﾞﾘﾂｨｳｽ	『父なる神よ』	1536 年
ｼﾞｬｯｹﾝ･ﾋﾞﾌﾙﾝ	『新約聖書』	1560 年
ﾄﾞｩﾘｯﾁ･ﾁｬﾝﾍﾟﾙ	『ダビデ詩篇』	1562 年
ﾀﾞﾆｴﾙ･ﾎﾞﾆﾌｧﾁ	『教理問答書』	1601 年
ｼｭﾃﾌｧﾝ･ｶﾞﾌﾞﾘｴﾙ	『若き人々の慰め』	1611 年

スイス文学会で研究発表を実施し、またスイス史研究会で隣接諸分野の研究者らと意見交換を実施することを通じて、本研究の位置を検証・確認しながら、社会に向けて単行本公刊（下記参照）といった形で研究成果を多角的に発表することができた。以下は補足情報であるが、現地のスイスおよびドイツのマスメディアから本研究者は取材を受け、新聞・テレビによって紹介されたことは、関心の高さの一端がうかがえる出来事であった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 中川裕之、外国語教育におけるドイッチュラントフンクの有用性、外国語教育のフロンティア、査読有、1号、2018、135－147
② 中川裕之、イゾ・カマルティン「自分のもの、他者のもの」、言語社会共同研究プロジェクト 2017　ドイツ語をめぐる言語社会研究、査読有、5号、2018、27－34
③ 中川裕之、イゾ・カマルティン「刑事裁判の文化史」、言語社会共同研究プロジェクト 2016　ドイツ語をめぐる言語社会研究、査読有、4号、2017、25－35
④ 中川裕之、イゾ・カマルティン「小文学」、言語社会共同研究プロジェクト 2016 ドイツ語をめぐる言語社会研究、査読有、4号、2017、37－47
⑤ 中川裕之、スイス・グラウビュンデンにおけるレト・ロマン語の書きことばの形成、言語社会共同研究プロジェクト 2015 ドイツ語をめぐる言語社会研究、査読有、3号、2016、1－14
⑥ 中川裕之、イゾ・カマルティン「国家と社会の中のマイノリティ」、言語社会共同研究プロジェクト 2015　ドイツ語をめぐる言語社会研究、査読有、3号、2016、49－58

〔学会発表〕（計１件）

① 中川裕之、グラウビュンデンのレト・ロマン語の聖書翻訳と抒情詩、スイス文学会、2016、明治大学（東京都）

〔図書〕（計４件）

① 中川裕之　他、大阪大学大学院言語文化研究科、言語社会共同研究プロジェクト 2017　ドイツ語をめぐる言語社会研究 5、2018、36
② 中川裕之、多言語グラウビュンデンのレト・ロマン語方言の書きことば成立の歴史　識字教育につながる聖書翻訳とその文学的開花例としての抒情詩、スイス文学会編、鳥影社、『スイス文学・芸術論集 小さな国の多様な世界』、2017、314（57-88）
③ 中川裕之　他、大阪大学大学院言語文化研究科、言語社会共同研究プロジェクト 2016　ドイツ語をめぐる言語社会研究 4、2017、52
④ 中川裕之　他、大阪大学大学院言語文化研究科、言語社会共同研究プロジェクト 2015　ドイツ語をめぐる言語社会研究 3、2016、58

〔その他〕
ホームページ
① http://www.lang.osaka-u.ac.jp/~nkg/naka.htm

メディア報道
① テレビ（スイス）：《Brooklyn-Glion: Nagin viadi memia lung per emprender rumantsch》 von Gion Hosang, *Radio-televisiun Svizra Rumantscha*, 2017

② 新聞（ドイツ）：《Und wie das funktioniert!》 von Angelika Overath, *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 2016

③ 新聞（スイス）: 《Der japanische Professor mit dem Faible für Rumantsch》 von Fadrina Hofmann, *Südostschweiz*, 2016

６．研究組織
(1) 研究代表者
中川 裕之（NAKAGAWA, Hiroyuki）
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号：10275000